

みことばとの出会い

高市和久

学生時代の私は無神論者でした。かつて信仰に立って世の人のために大きな働きをした方が多くおられたことも、今日尊い志をもって信心に打ち込む方がおられることも承知はしていましたが、これだけ科学が発達してくれば、宗教のお世話になることはだんだんなくなっていくだろう、言ってみれば宗教というのは過去の遺物であるというような考えだったのです。

そういう私にも、これこそ人生の羅針盤だと思える書物がありました。エーリヒ・フロムという人の『生きるということ』という本です。もともとは「持つのか、それともあるのか」という、何か鋭く問いかけてくるような題がついています。ひと言で言うと、20世紀の人間は豊かさを追いかけて持ち物を豊かにしようとしているうちに、自分が生きて「ここにいる」という感覚をどんどん失ってきている。でも、物を持つことを人生の基本に据えても幸せにはなれない。逆に何か悪いことが起こって持ち物を失ってしまうのではないか、あるいは買ったものが時代遅れになってしまうのではないかとといった不安にさいなまれることになる。そうではなくて、自分が生きていることを

日々感じ取り、喜ぶことを生活の基本にすれば、ほんとうの幸せを味わうことができるのだ、といったことを述べているのです。当時私は24,5歳だったと思いますが、高級腕時計やらブランド物のバッグやらがもてはやされる世相を何年も前に予見したような内容に感銘を受けまして、世界にこれ以上偉い先生はいない、この教えを自分の支えにして生きようと思って時折取り出しては読み返していたのです。

ところが、学校を出たあとたまたまキリスト教主義の学校に勤めることになります。初出勤の日に新任の教師ひとりひとりに中型の旧新約聖書をくれて、80過ぎの女性の理事長が「神さま、この先生方を本校のためにお選びくださいますありがとうございます」とかなんとかお祈りをされるので、自分たちでああだこうだと評議をして決めたのだろうに、神さまが選んだことになるのか、おもしろい考えかたをするんだなあなどと思いながら聞いていますと、突然、その場にいた30人ばかりの人が一斉に「アーメン」と言うわけです。テレパシーじゃあるまいし、この人たちはどうしてこんなに示し合わせたように声がそろうのでしょうか。「イエス・キリストのみ名によって祈ります」と言ったら終わりだから、と先輩に教わるまで不思議

でなりませんでした。

それから暇々に真新しい聖書を開いては読んでおりますうちに、マタイ 6:25 以下の「思い煩うな」（口語訳聖書ではそう訳していました）のところまで来たのです。空の鳥のように、あなたも目に見えないみ手によって養われている。野の花のように、あなたも美しい体をいただいている。生かされているではないか。だから大丈夫だ——イエスさまのそのみことばに心を動かされました。同時にびっくりしました。今までエーリヒ・フロムより偉い人は世界中探してもいないだろうと思っていたのに、なんと 2000 年近く前にまったく同じことを教えた人がいたのです。それからというもの、聖書がおもしろくてたまらず、暇さえあれば聖書を開いておりましたところ、その年のクリスマスに職場でいちばんかわいがってくれた先輩のお連れ合いが誘ってくださって教会に通うようになり、7月の末にバプテスマを受けてキリスト者になりました。

しかし、はたして自分はこのイエスさまの教えを守っていると言えるのかどうか。もしかすると理屈の上ですばらしい教えだと認めているだけで、体は反対のことをやっているのではないか。キリスト者になって

みると、そんなことがやはり気になってきます。あすのことを思い悩むなどイエスさまはおっしゃるけれど、何一つ悩みもなければあすのこともいっさい考えないなどという生活がそう簡単にできるわけがありません。そればかりか、ある日このことが気になるかと思えば、次の人は別のことを気かけなければならず、身の周りはどうちを向いても悩みだらけというのが普通ではないでしょうか。悩んではいけない、悩んではいけない、でも悩んでしまう。ああ、おれはだめだなあ、とついため息が出てしまうことになります。そこで一句。

悩むなど さとされるから なお悩む

思い悩むなどというイエスさまのみことばを聞いたために、かえって悩みが一つ増えるというおかしなことにもなってきます。おまえたち、信仰に堅く立っているんだぞ、ゆめゆめつまらぬことで思い悩んではならぬぞ、と戒められる厳しいイエスさまのお姿が浮かんでくるのです。

牧師になってから、「思い悩む」と訳されているメリムナオーということばは、確かに悩んでもしかたのないことをくよくよ思い悩むという場合もありますが、そうでない、むしろよい意味で使われることもあ

ることに気づきました。もちろんそういう箇所は「思い悩む」と訳したのでは通じませんから、「体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています」(第一コリント 12:25)、「テモテのように……親身になってあなたがたのことを心にかけている者はほかにいないのです」(フィリピ 2:20) のように、「配慮する」「心にかける」などと訳されています。しかし原文は同じメリムナオーなのです。それなら日本語でも同じことばで訳せないだろうかと考えて、「心配する」という訳に思い当たりました。友だちに「君のことが心配なんだよ」と忠告することばは温かく響きます。逆に何かにおびえる子どもに「心配するな。お父ちゃんがいるじゃないか」と言えばこれまた優しく聞こえます。これに「天の」を加えて「天のお父ちゃんがいるじゃないか」と言われたのがイエスさまだったとすれば、信徒を厳しく監視するような方ではないのです。

それにしても、同じ聖書でありながら、心配することを肯定的にとらえたり否定的に評価したりしているのはなぜでしょう。どういう心配をよしとし、どういう心配を否定しているのでしょうか。25 節と 31 節にヒントがあります。「何を食べようか、何を飲もうか」また「何を着ようか」というのは、「だれが」飲み食い

したり着たりするのでしょうか。原文を見ると、25 節では「あなたがた」、31 節は「わたしたち」であることがわかります。英語の聖書でもたいがいきちんと訳してあるようですから、英語をご存じなら確かめていただけるかと思います。要するに、あなたたち人間は、「自分たちが」何を食べ、「自分たちが」何を飲み、「自分たちが」何を着るか、そればかり考えているよね、と言っておられるのです。なるほどだれでも生活の心配をしないわけにはいきません。でもそれが恐ろしいのは、「あの人は」何を食べ、何を飲むのだろうか、「あの人は」何を着るのだろうか、食べる物や着る物がちゃんとあるだろうか、そういう心配をする心のゆとりがなくなってしまうということです。まさにそういう状態だから、自分の食べる物や着る物の心配がなくなるのです。なぜなら、皆が自分の心配で手いっぱいだったら、わたしのことを心配してくれる人はだれもいないということになるからです。

もしこれが逆だったらどうでしょう？ 仮に、わたしのことはだれかが心配してくれる、だからわたしは安心して他人の心配をしよう、と皆が思うような世界になったとしたらどうでしょう？ きっとだれもが安心して生きられる世界になるに違いありません。

「かぜでも絶対に休めないあなたへ」というかぜ薬の広告を見てぞっとしたことがあります。かぜで休むようなやつがどうなろうと知るもんか、自己責任だ、まいた種は刈るものだ、と多くの人が思い、行動していることの反映と言えます。何とも寂しい社会ではありませんか。でも、もしイエスさまのみことばに耳を傾ける人が増えれば、「自己責任社会」を「お互いさま社会」に変えることができます。それこそあらゆる心配事から解放される唯一の道ではないでしょうか。

ここまで来るのに、勤め先からもらった聖書の中にこのみことばを見つけてから 30 年、牧師になってから 18 年かかっていました。われながら鈍いことです。でも、イエスさまのことばには、たといつぐには受け入れられなくても、30 年心にひっかかり続ける力がある証拠だと思っていただけたらうれしく存じます。